

モデル事業名	「森の中の小さい、平和なまち」の外国人観光客おもてなしコミュニティづくり “2時間のおもてなし・日本一の通過型観光地を目指して”
活動団体名	特定非営利活動法人 北見NPOサポートセンター
ホームページ	
所属/ 担当者名	特定非営利活動法人 北見NPOサポートセンター 谷井 貞夫
連絡先	TEL 0157-22-2055 Eメール k-npo-sc@sea.plala.or.jp
活動地域	北海道置戸町

● 活動地域の概要

・集落数 4

集落別	人口	世帯数	人口	世帯数
置戸地区	2,304	1,144	境野地区	608
秋田地区	243	72	勝山地区	329

・高齢化率 37.33% (平成 21 年 3 月末現在)

・公共交通に関する状況

平成 18 年第 3 セクター鉄道ふるさと銀河線が廃止、バスに転換し現在に至る。

・産業、雇用状況

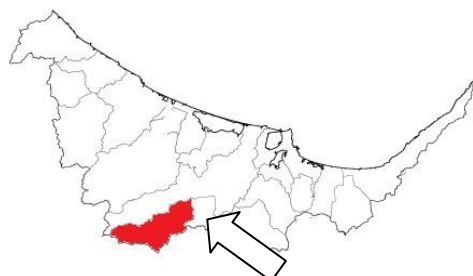
基幹産業の農林業は大きく衰退し、人口の減少に伴い小売業での就労減少が顕著である。

昭和 44 年 平成 18 年

事業所数	336	196
就労者数	2,707	1,264



【位置図】



【置戸町周辺地域図】



【町内店街等での外国人と町民との交流】

● 活動地域の課題

町民の間には、現状のコミュニティに対して不安、不満があるが、率先してその解決への行動は起こしにくい状況があった。外国人観光客への対応をきっかけに、置戸ホスピタリティのありようを、外部の講師や留学生等町外の人も参加し考える場を得たことで、既存のコミュニティの改善、新たなコミュニティの創出のための具体的な行動プランも見え出した。地域課題の解決法として、町内外に広く人材やアイデアを得られるようなネットワークを上手につくこと、またそのような動きを、しっかりと地元で支援する体制をつくることの重要性に気づいた。

● 活動の内容

(全体)

①おもてなしイベント創出

冬季釣りイベントは滞在時間の短さに対応した楽しみ方を、昨年度実施したアンケート等を参考に検討した。

北見工業大学留学生によるタウンマップ作成については、年度中の完成、配布を目指し、観光客の反応を調査した。

②ライブラリー・コミュニティ形成事業

町民と大学生（日本大学、北見工業大学）との協働による、交流型事業のためのワークショップを3回開催した。

③アーティスト・インOKタウン事業

日本大学芸術学部等、首都圏の美術系学生4名の夏・冬休み中のホームステイ受入れにより、町内芸術創作活動「アーティスト・インOKタウン」事業を実施し、学生と町民、観光客の交流をはかり、OKタウンの滞在の楽しみを宣伝するとともに、まちなかでの創作活動により活性化を目指した。



【北見工業大学留生活動状況】



【日本大学学生活動状況】



（直近1年間の進捗など）

置戸夏祭り、湖水祭りへの北見工業大学生の参加

● 活動の成果

・全体

○外国人観光客の来訪をきっかけとした新たな観光地づくり

講師、北見工業大学留学生、日本大学生など町外からの視点で町をみることで、置戸の伝統、特性を活かした観光地づくりに向けた「メニューづくり」や「意識改革」は着実に進み、町のコミュニティを見つめなおす大きな機会を得た。今回作成した中国、マレーシア観光客向けタウンマップや昨年実施した外国人向け氷上釣りイベントや、おもてなしメニューはこれからの誘客に向けた有効なツールとなる可能性がある。また住民の間でも、趣味で集めた世界のお金を「お金の博物館」として公開したり、商店街で外国人を意識した小さな工夫を行う店が増えるなど、町の変化をチャンスと捉えた前向きな自主的活動が生まれつつある。

○活動を通じたネットワークづくりやコミュニティの創生

本事業により、地域づくりに対する意見を町外の人も含めて話し合える場ができた。当初は活動に戸惑いを見せた住民もいたが、ホームステイ先になり当事者となる町民も増え、従来の外部の講師や留学生なども一段と活動に加わる中、次第に前向きな雰囲気へと変化し、外国人のみならず、おけと町民を含めた国内の人々を受容するまちとしての「置戸スタイル」について、パイロット・プロジェクトをスタートさせようという機運が盛り上がりだした。



【タウンマップづくり】



【ワークショップ】



【日大生作品展】

・直近1年間の成果など

日本大学生の事業参加に協力いただいた東教授が立教大学観光学部に移籍され、両大学の学生との交流の可能性が生まれてきた。今年8月に来訪され、新たな交流スタイルについて検討し、来年度からの事業実施を目指すこととなった。

● 今後の課題及び展望

・課題

タウンマップ作りを通しての北見工業大学やホームステイ受け入れでの日本大学芸術学部とのつながりも深まり、学生と地元住民との交流事業へのはずみがあった。

ワークショップを通して、「置戸ホスピタリティ」とは何かという普遍的な問いの重要性に気づいた町民が、自らの手で地域の活力を生み出していこうといった雰囲気も醸成されはじめている。ワークショップでは、全国トップクラスの貸出率を誇る図書館を生かした事業や、クラフトアートの町ならではの芸術文化を通じた交流事業など、地域に根ざした、伝統ある資源を活かした置戸ならではのまちづくり、観光地づくりを進める提案が出されるなど、主体的な取組への意欲が芽生え始め、さまざまなネットワークを形成しようと具体的な行動に移ろうとしていることから今後も様々な活動が期待できる。

・展望

北見工業大学留学生との交流事業について、周辺自治体の関心は高く、その方法について相談を受け、大学窓口を紹介したり、個別に学生にアプローチをしている。ある自治体では子どもたちの英会話教室講師に学生が参加するつながりもできている。また各自自治体のお祭り等のイベントに参加する機会も増えている。

● その他

2年間にわたり活動を行い、北見工業大学、日本大学等の学生と町民の交流が進んだことは、高齢過疎化が進む地域での地域間交流スタイルの一つとして提示できたと思う。